

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成24年度 実施報告書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	聖路加看護大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学

2. 研究交流課題名

(和文)： タンザニアの母子保健改善に貢献する持続的な若手研究者の育成
(交流分野： 母性看護・助産学)

(英文)： Sustainable development of novice researchers who will contribute evidence based midwifery for the promotion of maternal child health in Tanzania
(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.ap.slcu.ac.jp/mt5/asia-africa-jp/>

3. 開始年度

平成 23 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月 31 日
(2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：聖路加看護大学

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：学長・井部俊子

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：母性看護、助産学・教授・堀内成子

協力機関：

事務組織：聖路加看護大学事務局

相手国側実施組織（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

国（地域）名：タンザニア ダルエスサラーム

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：

(英文) School of Nursing・Professor・Sebalda Leshabari

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association

(和文) タンザニア助産協会

5. 全期間を通じた研究交流目標

タンザニアでは妊産婦死亡率が非常に高く、産科医療のアクセス・質の低さに関する問題が山積している。母子保健問題の改善という緊急性の高い社会的なニーズに対応すべく、母子保健を専門に研究教育活動ができる若手研究者の育成が急務であり、助産学専門の修士課程の設立が強く求められている。本研究交流では、「アジア・アフリカ助産研究センター」という共同研究拠点を形成し、交流を通して東アフリカ初となる助産学専門の修士課程をタンザニア・ムヒンビリ健康科学大学に設立する。

タンザニアと日本の助産教育の理念は、「エビデンスに基づいた安全な自然分娩を促進する」点において共通している。日本の助産高等教育は、聖路加看護大学大学院看護学研究科において、1983年度より修士課程が設けられており、助産学の教育者および研究者を数多く輩出してきた実績がある。本研究交流では、日本の持つ知識、人材や経験を移転するだけでなく、タンザニアの健康問題に合ったカリキュラム編成を行う。タンザニア国内で助産学専門の大学院教育を確立することによって、タンザニア人助産師が自国の保健問題改善に向け活動できる能力を育成し、タンザニアの母子保健分野の自立発展性を高めることを目指す。

またセミナー等学術会合を通し、設立する大学院修士課程の教員、助産師学校の教員グループや臨床現場の助産師にも学びの場を提供する。同時に日本の助産高等教育においても、助産師が国際的な視野を持ち、活動を展開する能力を養うことを目標としている。本研究交流で、日本人の若手研究者が国際的な活動の場やネットワークを広げ、今後共同研究などを行う基盤を作ることを目標としている。

6. 平成24年度研究交流目標

【研究協力体制の構築】

昨年度にはタンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の研究者を日本に招聘し、交流を重ね本事業の共通ゴールを確認、アジア・アフリカ助産研究センターの基盤を構築した。その研究協力体制を更に強めるため、本年度は日本国側研究者チームがタンザニア、ムヒンビリ健康科学大学を訪問、現地の出産施設や教育現場を視察し、タンザニアの助産の現状についてプロジェクトチーム全体で理解を深める。

【学術的観点】

共同研究に関して、R-1 では助産修士課程カリキュラム案をムヒンビリ健康科学大学に提出し、承認を得る。また、日本側研究者チームがタンザニアを訪問する際、国際学術ワークショップを開催する。前年度タンザニア側教員を招聘した際、ブラジル JICA プロジェクト専門家経験者、毛利多恵子氏が講義した「Humanization of Childbirth」に非常に感銘を受け、同内容をタンザニア助産師たちに周知したいとの要望があったことから、修士課程の臨床指導者となる臨床家にもそのコンセプトを理解してもらう機会としてワークショップを開催し、教員・学生に加え現地の臨床家も招待する。題材を「What is “humanized” childbirth in Tanzania? – Brainstorming conference –」とし、参加者とのディスカッションセッションを通してタンザニアにおける “Humanization of Childbirth” の概念をまとめ、明らかになった概念を今後、助産修士課程のカリキュラムの中にも含める。この研究の承認を得るため、日本・タンザニア両側の倫理審査を提出する。

R-2 では、日本側拠点機関を修了したタンザニア人助産師が昨年度までに思春期学生への性教育プログラムを農村地区に応用するための地区の選定、計画書作成を終え、タンザニア科学省への倫理審査を調整した。本年度は研究の承認を受けたのち、性教育プログラムを実施し、評価する。

【若手研究者養成】

本年度は日本側研究者チームがタンザニアを訪問するが、その際、参加研究者に加え、聖路加看護大学からも希望者を募り、国際保健、助産学に興味が高く、高い英語力を持つ学部生、大学院生を同行させる。アフリカの土地に足を踏み入れ、教育、出産の現場を見学する希少な機会を日本側の学生に提供する。

また、タンザニア側からも学部生、院生をワークショップに招待し、“Humanization of Childbirth” の概念分析の過程に参加する機会を提供する。タンザニア側にとっても若手研究者養成の貴重な機会となることが期待できる。

7. 平成24年度研究交流成果

(交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。)

7-1 研究協力体制の構築状況

初年度に発足したアジア・アフリカ助産研究センターでは、ムヒンビリ健康科学大学との研究者交流を通じてお互いの文化的背景、生活・研究環境、助産教育・医療事情の実際への理解を深めることができた。

今年度は日本側研究者5名、大学院生3名をタンザニアに派遣し、相手国拠点であるムヒンビリ健康科学大学、ムヒンビリ国立病院、地方都市であるバガモヨにあるバガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校、ザンジバル島のムナジ・モジャ病院、タンガ地区の農村地にあるムヘザ病院、ムヘザ看護学校、聖ラファエル病院、聖ラファエル看護学校を訪問し、都市部から農村部に渡る医療施設や教育現場を視察することができた。相手国側は訪問に当たっての調整業務に大きく貢献し、日本側研究者にとって、タンザニアの医療や看護教育の現状を学ぶ機会となった。

また、同じく平成24年度にタンザニアで開催したS-1のHumanization of Childbirthセミナーでは、相手国側研究者との協働によってお互いへの認識を深め、学び合うことができた。123名もの参加者を集めたのはタンザニア側研究者の告知努力の賜物である。一方、本セミナーにおける日本側研究者の企画・運営方法を通じて、相手国側研究者が事業マネジメントを学ぶ機会を得た。またセミナーの内容に関しても、日本の助産師が行っている活動について、日本に於ける日常的な助産ケア、日本の助産師の国際協力及び研究活動と幅広い内容を共有することができ、それらの事例紹介が、タンザニアに於ける助産ケアの変革へのモチベーションとなった。

S-1の開催後、両国の研究者でミーティングを行い、本事業の主軸であるタンザニア側での助産学修士課程の発足について、カリキュラムの再編状況を話し合い、来年度の修士課程発足に向けてのプロセスを確認した。今回の訪問を通し、総じて両国の関係性を深めるに至り、本事業基盤の強化につながる経験となった。

また初年度と同様、交流活動については、アジア・アフリカ助産研究センターのホームページやニュースレターの配信、また公開セミナーや雑誌掲載によって広く周知することができた。

7-2 学術面の成果

R-1では、相手国側実施組織であるムヒンビリ健康科学大学に新規開設する助産学修士課程への承認を受けるため、相手国研究者が自大学内のカリキュラム編成担当と話し合い、修正を重ねた。現在最終版が大学に提出され、来年度秋期より開講予定である。同課程開設に先立ち、本年度はベースライン調査として、現地の臨床で活動する助産師の助産ケアに対する認識を調査した。S-1の開催時に、タンザニア助産師を対象として”Humanization of Childbirth”、つまり出産を人間的に変革する際に必要なケアの中心概念である「女性を中心としたケア」への認識について、Women-centered care (WCC) pregnancy

questionnaire を用いてセミナー前後で測定し、Mixed methods（質・量両データ）でデータ収集を行った。量データはセミナーの教育プログラムの有用性を示し、質的データはセミナー中に行った”Humanization of Childbirth”をタンザニアでどのように実現して行くかというディスカッションからのアイデアを多く含んでいた。現在質・量両データを分析中であるが、タンザニア助産師の現在の認識と、今後への行動変容の示唆を得られる結果となることが予想される。

R-2 に関しては、前年度調整した研究計画の倫理審査の提出を行った。本年度は現地での調査担当である助産師が産前産後休暇に入ったこともあり、研究の実施には至らなかったが、来年度の実施に向けて、研究者間の調整は進めている。

なお、前年度のセミナーに参加した、日本側拠点に所属するインドネシアの助産研究者が、本事業の活動を基に自らの研究論文を発表するに至り (Yenita Agus, Shigeko Horiuchi, and Sarah E Porter: Rural Indonesia women’s traditional beliefs about antenatal care, BMC Research Notes, 2012, 5:589, doi:10.1186/1756-0500-5-589、論文に本事業の記載あり)、本事業の成果が将来的に他国への波及効果につながる第一歩となった。

本年度までの事業展開に関する報告を以下の5つ学会発表で行った。

1. Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Leshabari, S., Malima, K., Matsutani, M., Eto, H., Nagamatsu, Y., Oguro, M. Yaju, Y. “Process Report of a Collaborative Project between Tanzania and Japan to Develop a Master's Program in Midwifery” The 9th International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery (Kobe, Japan) June 2012
2. Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Leshabari, S., Malima, K., Matsutani, M., Eto, H., Nagamatsu, Y., Oguro, M. Yaju, Y. “Starting a Midwifery Master’s programme in Tanzania: Lesson learned from the collaborative project between Tanzania and Japan” The East, Central, and Southern African College of Nursing the 10th Scientific Conference (Port Louis, Mauritius) September 2012
3. Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Matsutani, M., Eto, H., Nagamatsu, Y., Oguro, M., Iida, M., Yaju, Y., Mori, T. “Process report of the collaborative project to develop the Master’s program in Midwifery in Tanzania: The seminar of “Humanized Childbirth”” St. Luke’s Academia (Tokyo, Japan) February 2013
4. Shimpuku, Y., Horiuchi, S. “The Concept of “Humanization of Childbirth with Women-Centered Care (HC/WCC): Japanese Nurse-Midwives’ Application of the Concept to Global Health Research, Education, and Practice” the 10th Annual National Conference, Asian American Pacific Islander Nurses Association, “Global Health: Nursing in the Future- Research, Education, and Practice” (Honolulu, Hawaii) March 2013
5. 堀内成子 シンポジウム「70億人時代の国際保健医療チームの人材とその育成：リプロダクティブヘルス」第28回日本国際保健医療学会東日本地方会（東京）2013年3月

3番目の第7回聖ルカ・アカデミアでは本事業のアウトリーチの活動が評価され、実行委員長賞を受賞することができた。

7-3 若手研究者育成

今年度、日本側研究者チームがタンザニアを訪問した際、今後国際的な助産研究に携わる意思を持つ日本側拠点機関の大学院生を3名同行させた。全員アフリカへの渡航は初めてであり、医療現場の見学や研究者との交流から、多くの学びを得ることができた。S-1のセミナーでは3人とも発表の機会を持ち、アフリカの助産師に対して英語で発表し、質疑応答するという貴重な経験を得ることができた。その成果をS-2に於いて日本でも発表し、現地での学びを共有する経験も得た。両セミナーの運営に於いても大きな役割を果たし、帰国後のデータ管理、分析にも携わってもらうことで、研究面での学びの機会ともなった。

また、タンザニア側でS-1に参加した多くの助産師が、今秋開講予定の助産学修士課程に進学を希望している。タンザニア側の発表の中で、学術能力に秀でている助産師も複数名、見出すことができた。助産学修士課程の入学候補者に会い、若手研究者候補に”Humanization of Childbirth”の概念やディスカッションでの学びの機会を提供した。

7-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

本事業の最終的な目的は、高い妊産婦死亡率の続くタンザニアにおいて、大学院教育を推進することで、助産教育を向上させ、Women-centered Care（女性中心のケア）、Evidence-based Practice（エビデンスに基づいた実践）の概念に沿った臨床助産ケアの改善と妊産婦の健康の改善をもたらすことである。なかなか改善されないタンザニアの高い妊産婦死亡率の問題は、臨床的なケアの質の問題にとどまらず、女性のジェンダーの問題、貧困、教育といった様々な因子が入り組んでおり、一朝一夕に解決するものではない。持続的にこの問題に取り組んでいくには、現地の助産・リプロダクティブヘルス研究者の育成が急務であり、点から面への支援体制につなげるため、継続的に人材を育成していく必要がある。

今年度S-1で行ったセミナーでは、助産学修士課程が国内に開設されたらすぐにも進学したい意思のある助産師に多く出会うことができた。現場で働く助産師たちも、ケアの变革を求めて病院のマネージャーや政策立案者と話し合い、意見を出していく中で、研究によるエビデンスを提示することの必要性を感じており、修士課程で学ぶことの必要性を感じていた。先進国の経済成長率が低下する中、海外からの奨学金支援による留学の機会は減る一方であり、国内で若手研究者を育成する必要性が高まっている。

また、S-1セミナー参加者から、タンザニアにおいて“助産師は冷たい人”とのイメージが持たれている現状に対し、業務多忙や人材・設備不足の状況下であっても、ケアの精神を忘れず実践することが重要であり、社会の助産師イメージを変えることにつながるという発言が寄せられた。セミナー開催を通じ、助産師は高学歴であると同時に人々に寄り添

う援助者である、という概念をセミナー参加者にもたらしたことが成果として挙げられる。

今年度、相手国側代表の Dr. Sebalda Leshabari が学部長に選任され、助産学修士課程の大学への申請プロセスを直接行う立場になった。3月に最終申請を済ませており、平成25年秋より開始予定であることを確認している。実際に開始すれば、タンザニア助産師に限らず、東アフリカ周辺諸国全体に大きなインパクトを与える社会貢献となる。

7-5 今後の課題・問題点

初年度と同様、タンザニアのインフラの問題や環境の不特定要素からの事業への影響は持続しているが、2年目となり、相手国側の事情を加味したコミュニケーション方法を学ぶことができた。計画に対し早めに話し合いと準備を進めること、メールで伝わらないときには電話で直接話すなどの対応を今後も持続していく。また、今年度は予定していた R-2 の実行が担当研究者の妊娠・出産により延期されたが、来年度には実施できる準備は進んでいる。来年度は確実に実行されるよう、マネジメントを行っていく。

来年度も日本側拠点からの渡航は二度予定している、相手国側拠点における助産学修士課程の開始が濃厚となり、開始に際した相手国でのセミナーは、本事業の成果発表の機会となり、メディアも含めた広報活動を行う必要がある。また今年度は相手国側の日本への招聘はなかったが、来年度はまた日本への招聘を計画中である。初年度の経験を活かし、すみやかにビザの取得や相手の休暇の調整などを行っていく。

今年度タンザニア訪問時、JICA タンザニア事務局とコンタクトを取り、有機的な協力関係を構築するために話し合いを進めている。今年度行った R-1 の研究結果から、臨床現場の状況をより詳しく聴取し、記述する R-3 の研究の開始を予定しており、今年度はデータ収集に1名の研究者の1ヶ月以上の滞在を計画している。そうした中、安全に生活し、必要なサポートを現地で受けられるよう、在タンザニア日本機関との関係強化をする必要がある。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成24年度論文総数 1本

相手国参加研究者との共著 0本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

8. 平成24年度研究交流実績状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成23年度	研究終了年度	平成25年度
研究課題名	(和文) タンザニアの助産若手研究者育成カリキュラム作成と評価 (英文) Curriculum development and evaluation of novice midwifery researchers in Tanzania				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授 (英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	Sebalda Leshabari, School of Nursing, Dean				
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先	日本 〈人/人日〉	タンザニア 〈人/人日〉	モーリシャス 〈人/人日〉	計 〈人/人日〉
	派遣元				
	日本 〈人/人日〉	実施計画	(4/8)	1/5	1/5 (4/8)
		実績	(4/8)	1/5	1/5 (4/8)
	タンザニア 〈人/人日〉	実施計画	0/0		0/0
		実績	0/0		0/0
	〈人/人日〉	実施計画			
		実績			
	合計 〈人/人日〉	実施計画	0/0	(4/8)	1/5 (4/8)
		実績	0/0	(4/8)	1/5 (4/8)
	② 国内での交流 1/3 (6/6) 人/人日				
日本側参加者数					
6名	(12-1 日本側参加者リストを参照)				
タンザニア側参加者数					
5名	(12-2 相手国タンザニア側参加研究者リストを参照)				
24年度の 研究交流活動	これまでの交流、研究活動(カリキュラム開発とステークホルダーミーティングの結果、Humanized Childbirth セミナーの結果)について学会で発表する。計画通り、9月にモーリシャスで開催された The East, Central and Southern African College of Nursing (ECSACON)の学術大会でアジ				

	<p>ア・アフリカ助産研究センターの活動をまとめ、発表した。加えて、WHO Collaborating Center Conference、聖ルカ・アカデミア、Asian American Pacific Islander Nursing Association Conference、国際保健医療学会東日本地方会など招待講演も含め発表を行った。</p> <p>助産修士課程の施行を目指し、前年度に開発した助産修士課程カリキュラム案をムヒンビリ健康科学大学に提出し、承認を得るプロセスに入った。</p> <p>日本側研究者チームがタンザニアを訪問し、ジョイントセミナー「What is “humanized” childbirth in Tanzania? – Brainstorming conference –」を開催した。セミナー中に Women-centered care (WCC)の認識に関する質問紙調査を行い、グループディスカッションを通して、タンザニアにおける “Humanization of Childbirth”をどのように実現可能か話し合った。本研究の実施に先立ち、日本・タンザニア両側から研究計画に対する倫理審査承認を得た。</p>
<p>24年度の 研究交流活動から 得られた成果</p>	<ol style="list-style-type: none"> ① 本事業の過程をアフリカ諸国の看護教育関係者の集う ECSACON 学術集会にて、アジア・アフリカ助産研究センターの活動を周知することができ、同じく修士課程を立ち上げたいマラウィ、ウガンダ、ザンビアの教育機関から、コラボレーションの可能性を打診された。本事業がアフリカに於いてニーズの高い活動を行っていることが改めてわかり、今後の発展をイメージすることができた。 ② モーリシャスの ECSACON 学術大会に派遣した若手研究者にとって、アフリカ研究者、特に関係するタンザニア看護教育関係者（Nursing Council Registrar, タンザニア看護協会会長、臨床教育者等）を前に発表し、意見交換を経験する貴重な場となった。関係者と数日間を共有することで、良いネットワーキングの機会ともなった。 ③ その他に、WHO Collaborating Center Conference、聖ルカ・アカデミア、Asian American Pacific Islander Nursing Association Conference、国際保健医療学会東日本地方会といった様々な場で、多彩な対象に対して発表を行うことができた。どの場でも本事業の先進性、独自性に対する評価を受け、聖ルカ・アカデミアでは受賞した。 ④ 相手国側代表が学部長に選出されたため、助産修士課程の大学からの承認に対して直接働きかけることができるようになり、本年度の話し合いを通して、来年度秋からの開始が濃厚となった。 ⑤ 「Humanization of Childbirth」を研究者、指導者、臨床助産師と共有し、どのようにタンザニアで実現できるかの討論と、WCC 質問紙調査のデータ収集を行った。分析結果をまとめて発表することで、カリキュラムの基本概念が明確になり、来年度からの共通理解に基づいたカリキュラムの実施が期待できる。

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 23 年度	研究終了年度	平成 25 年度	
研究課題名	(和文) タンザニアの思春期男女への性教育プログラムの評価：都市部と農村部の比較					
	(英文) Sex education program for adolescent boys and girls in Tanzania: A comparative study between city and rural areas					
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授					
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor					
相手国側代表者 氏名・所属・職	Sebalda Leshabari, School of Nursing, Professor					
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流					
	派遣先		日本	タンザニア		計
	派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本 <人/人日>	実施計画		1/30 (2/8)		1/30 (2/8)
		実績				
	タンザニア <人/人日>	実施計画	0/0			0/0
		実績	0/0			0/0
	<人/人日>	実施計画				
		実績				
	合計 <人/人日>	実施計画	0/0	1/30 (2/8)		1/30 (2/8)
		実績	0/0	2/6		2/6
② 国内での交流		0/0	人/人日			
日本側参加者数						
3 名	(12-1 日本側参加者リストを参照)					
タンザニア側参加者数						
1 名	(12-2 相手国タンザニア側参加研究者リストを参照)					
24年度の 研究交流活動	<p>24年度は研究許可が下りた後、実際に性教育を実施し、評価研究を実施する計画であったが、研究担当者の妊娠・出産と重なり、実施を延期した。研究者の出産前に訪問し、研究の実施についての話し合いを行った。研究許可については、提出書類の追加が求められ、追加を行った。</p> <p>実際の性教育とデータ収集は、バガモヨ地区において11-16歳の少年少女を対象に紙芝居形式で行うため、バガモヨの視察を行った。</p>					

<p>24年度の 研究交流活動か ら得られた成果</p>	<p>① 本年度の実施は延期になったものの、具体的な実施のプロセスを研究 担当者と直に話し合う機会を持つことができ、25年度の実施に向けて の見通しを立てることができた</p> <p>② 話し合いの場を持つことで、相手側研究者との信頼関係を深め、日本 側若手教員も臨機応変に対応する国際研究の柔軟性を身に付けること ができた。</p> <p>③ 研究許可の申請プロセスを進め、25年度の実施のための準備が整った。 ※R-2のデータ収集が延期となったため、担当研究者との話し合いの日数 のみR-2として計上する。</p>
--------------------------------------	---

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「タンザニアにおける“人間的な”出産とは? –ブレインストーミングカンファレンス–」
	(英文) JSPS AA Science Platform Program “What is “humanized” childbirth in Tanzania? – Brainstorming conference – ”
開催期間	平成 24 年 9 月 1 日 ~ 平成 24 年 9 月 2 日 (2 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア、ダルエスサラーム、ホテル
	(英文) Tanzania, Dar es Salaam, Hotel
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授
	(英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Khadija, Malima, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, Dean (開催時)

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (タンザニア)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	6/12
	B.	1/2
	C.	
タンザニア 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	5/10
合計 〈人/人日〉	A.	6/12
	B.	1/2
	C.	5/10

A. セミナー経費から旅費を負担

B. 共同研究・研究者交流から旅費を負担

C. 本事業経費から旅費を負担しない (参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>タンザニアではこれまで妊産婦死亡率の高さから、出産時の救急産科ケアや医療介入といった側面が強調され、医療機関での出産に対し不安、不信感を持つ妊産婦が多い。このため、現在でもタンザニア女性の約半数が専門家のいない自宅で出産しており、結果として妊産婦死亡率の改善も遅れている。</p> <p>そういった背景から、助産修士課程の中心概念となる「Humanization of Childbirth “人間的な出産”」を、日本の助産教育、助産実践を通してタンザニア教育関係者、学生、臨床助産師に周知し、妊婦死亡率改善への寄与を目指す。</p>
<p>セミナーの成果</p>	<p>① 本事業の中心課題（R-1）で作成、申請中である、修士課程の中心的コンセプトである「Humanization of Childbirth」を、タンザニア教育関係者、学生、臨床助産師に浸透させる機会となった。特に小グループディスカッション・発表を通し、タンザニアの現状に即したタンザニア版「人間的な出産」について考えることができた。発表の中で、「もう外国や援助機関にばかり頼らず、現場の私たちが日常的なケアにあたる姿勢から変えていかなければならない」という発言があり、タンザニア助産師の実践の変革、リーダーシップを刺激する結果となった。</p> <p>② 講演を通し、日本の助産教育、助産実践、国際協働の実践を、セミナー参加者であるタンザニア側研究者、タンザニア教育関係者、学生、臨床助産師が学ぶことができた。大多数が臨床助産師、教育関係者であり、技術的な話題（仰臥位以外の出産体位など）に興味を示したため、デモンストレーションを行って日本の助産実践を示した。</p> <p>③ 日本側研究者、日本側学生にとってもタンザニアにおける発表、討論の貴重な機会となり、妊産婦死亡率の高い、医療的な条件の整っていない場所での出産、異なった文化における出産を学ぶことができた。特に若手研究者として院生にも英語による発表の機会を与えた結果、海外でのプレゼンテーション技術を向上する機会となった。</p> <p>④ タンザニア側参加者には学士号取得者、取得中の助産師も数多く、現在 R-1 で作成、申請中である助産修士課程に進学を希望している者が多かった。発表の中で、セミナー内容をまとめる力、プレゼンテーション力に於いて優秀な者が数名おり、助産修士課程一期生の候補者を発掘する機会ともなった。</p>

セミナーの運営組織		聖路加看護大学参加研究員、事務局 ムヒンビリ健康科学大学参加研究員、事務局			
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	会議費	金額	1,375,945円
			外国旅費		1,593,575円
			備品・消耗品		17,900円
			印刷費		2,474円
			合計		2,989,894円
	タンザニア 側	内容	通信費		10,000円
			国内交通費		30,000円
			合計		40,000円

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業『『人間的な出産』に対するタンザニア臨床助産師たちの声を届ける報告会』 (英文) JSPS AA Science Platform Program “Conveying voices of Tanzanian midwives toward “humanized” childbirth”
開催時期	平成 24 年 11 月 9 日 (1 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加看護大学 (英文) Japan, Tokyo, St. Luke’s College of Nursing
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・母性看護、助産学・教授 (英文) Shigeko Horiuchi, Maternal Infant Nursing & Midwifery, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	7/7
タンザニア 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	7/7

A.セミナー経費から負担

B.共同研究・研究者交流から負担

C.本事業経費から負担しない(参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>タンザニアではこれまで妊産婦死亡率の高さから、出産時の救急産科ケアや医療介入といった側面が強調され、医療機関での出産に対し不安、不信感を持つ妊産婦が多い。このため、現在でもタンザニア女性の約半数が専門家のいない自宅でお産しており、結果として妊産婦死亡率の改善も遅れている。</p> <p>そういった背景から、聖路加看護大学アジア・アフリカ助産研究センターでは、2012年8月、タンザニアの臨床助産師を対象に、「Humanization of Childbirth “人間的な出産”」の概念、日本の助産教育、助産実践、国際協働を周知し、妊産婦死亡率改善への寄与を目指すセミナーを開催した。セミナーには120人を超える参加者が集まり、現場の助産師同士の興味深いディスカッションが行われた。本報告会では、タンザニア助産師の生の声を日本に届け、またそのセミナーの実施運営や発表に関わった聖路加看護大学の院生より、タンザニアでの貴重な国際協働経験を共有し、学生同士の意見交換・知的交流を深める。</p>
<p>セミナーの成果</p>	<p>① 日本側拠点である聖路加看護大学を会場として開催し、学内外の看護学部生・大学院生、海外プロジェクトのコーディネーターなど、幅広く様々な参加者を得た。本事業の具体的な取り組みや相手国タンザニアの出産の現状について、とりわけ「Humanization of Childbirth」に対して8月のセミナーに参加したタンザニア臨床助産師から集められた意見を日本の研究者・学生に伝えることができた。</p> <p>② 本事業に対し、内外の研究者・学生から質問や意見を受けた。参加者の中には青年海外協力隊やその他国際事業に携わった人材も多く、出産事情に対しては、他の発展途上国に於いても似たような現状（出産が多い、医療者の疲弊、ケアの質の低下）にあること、その中で、今回のセミナーでは現地の医療者自身が肯定的に「Humanization of Childbirth」のコンセプトを受け取り、それを実践するための具体的な行動計画を提示していたという成果に対し、驚きを示すとともに賞賛の声が多く聞かれた。この事業の方向性や活動が、内外の研究者・学生の視点からも好意的に受け取られるものであると理解できた。また、発言のあった参加者が個人で関わった国と、タンザニアの国の背景の違いについての言及も多く、様々な国との比較を共有することができた。これらの意見交換を通じ、今後の事業計画には、国の背景、特に医療者の労働環境などを考慮する必要性を確認した。</p>

セミナーの成果	③ 発表を担当する日本側研究者、特に大学院生にとって、聞き手が体験したことのない経験をわかりやすく伝える技術や様々な背景の参加者間での発展的なディスカッションの方法を学ぶ機会となった。3名の大学院生は、参加者が理解できるように写真や図を有効に活用し、聞き手の視点で発表資料を作成した。参加者からの質問の中で、セミナーを行うきっかけや質問紙の結果に対する関心、タンザニアで出産する母親の声に対しての興味などが認められたため、今後学会などで発表する際には、これらの質問内容に応えるよう留意する。		
セミナーの運営組織	聖路加看護大学参加研究員、事務局		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 会議費	金額 10,649 円
	タンザニア 国（地域）側	内容	金額

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣元		派遣先		計 〈人／人日〉	
		日本 〈人／人日〉	タンザニア 〈人／人日〉		
日本 〈人／人日〉	実施計画	/	5/10	5/10	
	実績		8/69	8/69	
タンザニア 〈人／人日〉	実施計画		0/0		0/0
	実績		0/0		0/0
〈人／人日〉	実施計画				
	実績				
合計 〈人／人日〉	実施計画	0/0	5/10	5/10	
	実績	0/0	8/69	8/69	
② 国内での交流		0/0 人／人日			

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
聖路加看護大学・教授・堀内成子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月28日～9月2日 (内2日間セミナー)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。
長崎大学・教授・江藤宏美	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月25日～9月2日 (内2日間セミナー)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。 ザンジバル島ムナジ・モジャ病院の視察と医療者との交流。
聖路加看護大学・助教・長松康子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月27日～9月5日 (内2日間セミナー)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。 バガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校の視察・交流。
聖路加看護大学・助教・新福洋子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月11日～9月4日 (内2日間セミナー、3日間R-2)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。 バガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校の視察・交流。

聖路加看護大学・助教・飯田真理子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月11日～ 8月19日 (内3日間R-2)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 タンガ地区の農村地にあるムヘザ病院、ムヘザ看護学校、聖ラファエル病院、聖ラファエル看護学校の視察・交流。
聖路加看護大学・博士課程後期・若井翔子	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月27日～ 9月5日 (内2日間セミナー)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。 バガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校の視察・交流。
聖路加看護大学・博士課程前期・下田佳奈	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月27日～ 9月5日 (内2日間セミナー)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。 バガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校の視察・交流。
聖路加看護大学・博士課程前期・高畑香織	タンザニア・ダルエスサラーム・ムヒンビリ健康科学大学	8月27日～ 9月5日 (内2日間セミナー)	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学の視察と教員・学生との交流。 ムヒンビリ国立病院の視察と臨床における助産師、看護師との交流。 バガモヨ県立病院、バガモヨ県立看護学校の視察・交流。

9. 平成24年度研究交流実績総人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先		日本 〈人/人日〉	タンザニア 〈人/人日〉	モーリシャ ス 〈人/人日〉	〈人/人日〉	〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉	実施計画		11/50 (6/16)	1/5			12/55 (6/16)
	実績		8/89	1/5			9/94
タンザニア 〈人/人日〉	実施計画	0/0					0/0
	実績	0/0					0/0
〈人/人日〉	実施計画						
	実績						
〈人/人日〉	実施計画						
	実績						
〈人/人日〉	実施計画						
	実績						
合計 〈人/人日〉	実施計画	0/0	11/50 (6/16)	1/5			12/55 (6/16)
	実績	0/0	8/89	1/5			9/94

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は()をのぞいた人数・人日数としてください。)

9-2 国内での交流実績

実施計画	実 績
1/3〈人/人日〉	1/3〈人/人日〉

10. 平成24年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	137,975	
	外国旅費	2,619,054	
	謝金	1,082,090	
	備品・消耗品購入費	68,879	
	その他経費	1,092,002	
	外国旅費・謝金等に 係る消費税	0	
	計	5,000,000	
委託手数料		500,000	
合 計		5,500,000	

11. 四半期毎の経費使用額及び交流実績

	経費使用額 (円)	交流人数<人/人日>
第1四半期	125,917	1/3
第2四半期	4,294,793	9/94
第3四半期	179,552	0/0
第4四半期	399,738	0/0
計	5,000,000	10/97